

2016年度図書館活動概要

著者	沼倉 宏
引用	学術情報センター年報 情報. 23, p.2-3
URL	http://hdl.handle.net/10466/15619

2016年度図書館活動概要

図書館長 沼倉 宏

はじめに

本誌『情報』には学術情報センターの現状とこの1年間の活動が詳細に記されている。図書館の活動報告においては図書館が何をしてきたかが漏れなく述べられている。何をしなかったかもわかるので、この資料は今後必要に応じて何をするか・何ができるかを考える出発点となる。統計資料の数字たちは現在の図書館の姿を描き出すが、最近3年間のデータを並べているので時間軸に沿う変化を垣間見ることできる。萩原弘子前図書館長は第21号の巻頭言において、『情報』の統計数値の10年の推移から図書館の変容を描き出し、これからの図書館についての示唆を述べた。現状をよく認識するには過去からの経緯を把握することが有用である。本誌に収録された記録、特に詳細な統計データは誰のため何のためのものか疑問に思われるかもしれないが、ある視点を持ってこれらを眺めると見えてくるものがある*。

基盤となる資産

図書館組織全体での蔵書数は99万（うち73万冊が和書、26万冊が洋書）、2016年度に寄贈も含めて和書6330冊、洋書840冊を加えた。冊子体の雑誌は1万6千誌を所蔵、1700誌（国内誌1500、国外誌200）を受け入れているが、購読しているのは600誌弱である。電子ジャーナルは契約タイトル数1万9千、データベースは11種、電子書籍は3千タイトルを契約している。電子書籍の契約タイトルはそれまでの和書500点洋書500点から洋書が2千点増えた。これらにかかる費用は図書購入1940万円、冊子体の雑誌購読990万円、電子資料1億6千万円、合計約1億9千万円であった。資産と費用のこのような状況は2015年度とほぼ同様だが、紙媒体図書・雑誌とデジタル資料にかかる費用の比率は2014年度の21:79、2015年度の17:83から2016年度は15:85となり、デジタル資料の重みは着実に増している。研究用資料の整備状況は一定の水準を保っているが、図書については国際化の進展に向けて大学院生向けの英語の教科書・参考書などを中心に外国図書を充実させてゆく必要があるように思われる。購入する図書は、図書館長、学術情報室長、学期毎に各領域から選出される教員4名による選書会議と、公募で選ばれた学生・院生による「学生選書」で選んでいるが、選書会議の方法には工夫の余地がある。留学生に積極的に関わってもらおう方法も考えたい。

利用状況

図書貸出冊数は数年前から毎年2～3%減少していたが、2014年からは入館者数も減少に転じ（毎年約5%の減）、その傾向は続いている。2016年度は利用対象者数も前年度より5%近く減っているが図書の主な借り手である学生・院生数はほとんど変わっていないので、学生・院生が図書館に来る頻度、本を借りる頻度が低下していることは確かであろう。なお、学域学生に限って資料には記載されていないデータを詳しくみると、学生数5,870に対し学情センター

* データの一部は広報誌『アウリオン』に過去5年の変化が棒グラフでわかりやすく示されている。学術情報リポジトリOPERAで閲覧できる。

図書館での貸出冊数が37,682で、一人あたり6.4冊となる。この数字に学年間ではあまり差はない。これに対し、学情センター図書館への入館者延べ数は1年生6万2千、2年生4万7千、3年生5万、4年生2万3千となっている。多くの専門分野の4年生は研究室に配属されると図書館を訪れる機会が減ることは想像に難くないが、2年生の入館者が著しく少ないことが目立つ。その実態と理由を明らかにしたいところである。

近隣の国公立大学の状況を各大学が公開している情報から探ってみたところ、本学と同様に学生の図書館利用が減っている大学もあるが、そのような傾向が認められない大学もある。しかし、ありとあらゆる情報にいつでもどこでもアクセスできる究極のモバイル端末機器を持つ学生たちが、1日24時間という変わらぬ条件の中で読書に費やす時間が減るのは当然とも思う。デジタル資料のオンライン利用が中心となりつつあるいまでは入館者数と貸出冊数は利用状況の一つの指標にすぎないであろうから、これらにあまりとらわれずに、学生にとって魅力的な図書館、有用なサービスとはどのようなものかを考えてゆけばよいのかもしれない。例えばラーニングコモンズは利用頻度が高い状態が続いており、学生には役に立つものなのであろう。いっぽう貸出PCの利用は前年度の約2/3に減ったが、これは個人のPCを大学に持参する学生が増えたためと想像される。

電子ジャーナル、データベースの利用、レファレンスサービスの状況はこれまでとあまり変わらない。他機関との相互協力も一昨年とほぼ同様で、図書は貸出が借受の1.2倍、文献複写も提供が取寄の1.45倍であったが、相手を大学図書館に限ると貸し出/借受、提供/取寄ともにほぼ同数であり、本学の収蔵資料は大学コミュニティの中では平均的な水準で名実ともに相互に協力していると見ることができる。

学術情報リポジトリOPERAは2016年4月に登録数が1万を超え年度末には10,329に達したが、意外にも閲覧件数、ダウンロード件数ともに前年度をそれぞれ6%、29%下回った。本学は2016年11月にオープンアクセス方針を策定し、2017年4月から教職員の学術研究の成果は原則としてオープンアクセスとすることとなった。OPERAはその中心的な役割を担うものであるから、今後は登録件数が大幅に増え、それに伴ってアクセスも増えると予想されるが、来年の統計はどのようなになるだろうか。

広報・啓蒙活動

広報、展示、講演会などの企画は前年度とほぼ同様に行われた。これらのうち学生を主な対象と想定して4月と10月のLibrary Monthに開催している小さな講演会（ライブラリートーク、しばしば音楽演奏などの実演を含む）は一般学生にとって図書館に親しみを持ってもらいやすい機会となりそうなのだが、参加者が少ないのが残念である。2017年4月には芥川賞作家の柴崎友香氏を招いてライブラリートークを開催したが、本学卒業生でもあるのに参加者は50名弱であった。いろいろな企画の広報宣伝をより効果的にする余地はないか、あるいは発想を変えて、図書館で仕掛けて待つのでなく学園祭などに積極的に出てゆくようなことも考えてはと思う。広報誌『アウリオン』は以前は印刷配布していたが、あるときから費用（対効果？）の点からリポジトリに置くだけになったそうである。学生にも親しみやすい構成内容で上手に作っているのに甚だもったいないことである。手に取れる、持ち帰れるようにして、「図書館に親しんでもらう」役割を果たすものとしたい。